

東北アジア学術交流懇話会ニュースレター

うしとら

第19号

● 目次 ●

静かな激論…高句麗遺跡の世界遺産登録そして東北工程	1
万華鏡：シベリアの美肌フルーツ・オビルビーハの契機	2
Area Report [SIGNAL]：「中国」・「ロシア」・「内モンゴル」	3
トピック：駐ロシア連邦 野村一成特命全権大使 日本館訪問	4
日本館便り	4
研究機関紹介：モンゴル科学アカデミー・ウランバートル大学	5
モンゴル科学アカデミー歴史研究所とシンポジウム共催	6
最近のセンター出版物より	7
センター動向	7
所感：カムチャツカの熱き思い	8

静かな激論……

高句麗遺跡の世界遺産登録そして東北工程

本懇話会理事／東北大学大学院環境科学研究科教授 成澤 勝

中国と北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）との国境河川鴨緑江および豆満江はいわゆる「脱北」問題でよく話題になった。ところが最近もうひとつ熱い論争が巻き起こっている。

中国蘇州で開催されるはずであった本年6月の第27回世界遺産委員会はSARSで急遽パリで開催されることになった。蘇州で議論されることになっていた「高句麗遺跡（北朝鮮）」の世界遺産登録問題もパリの場に移された。表向き中国も賛成していたし、当然採択されると思われていたが、予想に反し次回に回された。中国側の本音としては認めるわけにはいかなかったのである。すでに朝鮮史では高麗の金富軾がその著『三国史記』で高句麗史を自らの歴史として扱っているが、しかしその発祥の地は現在の中国であり、BC37年から460年間も都を現在の吉林省集安に置いているわけで、中国としても自国の歴史として見ざるを得ないとしている。中華人民共和国が成立してしばらくはこうした史観対立はなかった。そもそも韓国・北朝鮮が高句麗史を当然のごとく朝鮮

部署は国家文物局文物保護司世界遺産処である。しかしここで処理しきれような問題ではない。国家的規模で組織的・体系的な対応策が練られてきている。アカデミズムの方面からの研究は中国社会科学院中国边疆史地研究センターである。ここを中心に、東北辺境地域の安定を目的とした「東北工程」と称されるプロジェクトが組織されている。特に具体的な研究課題としては、古代中国境域理論、東北地方史、東北民族史、古朝鮮・高句麗・渤海史、中朝関係史、東北辺境とロシア極東地区との政治経済関係、東北辺境社会安定戦略、朝鮮半島情勢およびその中国辺境安定に及ぼす影響等を重点化している。センター主任（長）は厲声氏、しかし実質的中心人物は馬大正研究員。指揮系統では王洛林中国社会科学院副院長、全哲洙吉林省副省長らが指導に当たっている。馬大正研究員には最近『国家利益高于一切（国家利益は一切に優先する）』『古代中国高句麗歴史叢論』（共）等境域安定を説く著書が多い。

この春にはこの方面のトップにいる李嵐清前副総理が長春を訪れ、さらに東北辺境の一大拠点である延辺朝鮮族自治州にも自家用機で乗り込み視察した。8月には延吉市で中国边疆史地研究センターとの共催のもと延辺大学中朝韓日文化比較研究センター（吉林省にも数少ない中国教育省直設の高等研究所）において「高句麗渤海問題学術討論会」が開催され、国内各地から25名の専門家たちが参集してディスカッションを重ねた。中朝韓日文化比較研究センターには大きな宿題が出来たようである。



高句麗国内城壁遺構



完全ガラス張り化以前の広開土王碑

史に組み込んで扱っていることに、対し80年代半ば遼寧省科学院の孫進己氏が異を唱えたところから始まる。特に最近の韓国の在外僑胞関連法案の整備や南北朝鮮の接近を目の当たりにすれば、200万ともいわれる朝鮮族を抱える中国としては彼らの民族意識ばかりでなく、領土論議への広がりに対して警戒感を示すのも理解されてくる。その高句麗の遺跡の北朝鮮による世界遺産登録申請が通れば、高句麗史を朝鮮史として認めたとも取られるから事は重大である。

世界遺産に関わる中国側の担当



シベリアの美肌フルーツ・オビルピーハの奨め

東北大学大学院農学研究科教授 金濱 耕基



(写真1) 日本で初めて実ったオビルピーハ

1993年と1999年のロシア科学アカデミー・シベリア支部訪問団に参加して、日本人としておそらく初めて、多機能性の新規ベリー・オビルピーハを発見し、導入しました。オビルピーハとはグミ科の植物で、*Hippophae rhamnoides* L.という学名がついています。

Hippophae rhamnoides L.には9つの亜種があって、シベリア原産の亜種オビルピーハはvar.*mongolica*に分類されています。類似の植物として、ヨーロッパ原産の亜種var.*rhamnoides*、中国原産の亜種var.*sinensis*などがあり、それぞれ英語でシ

ーバックトーンあるいはドイツ語でザントドルン、中国語で沙棘と呼ばれています。いずれの亜種も日本語での適切な呼び名がないことから、著者はロシア語のoblepikha オビルピーハという呼び名で紹介しています。紹介記事の一例は下記のとおりです。

- | | |
|---------------------|---------------------------------------|
| 1993年12月 | ロシア科学アカデミー・シベリア支部訪問団報告書、東北大学国際交流課、仙台。 |
| 1994年9～11月 | 農業および園芸、第69巻第9～11号、養賢堂、東京。 |
| 2003年3月 | 東北アジアアラカルト、第1号、東北大学東北アジア研究センター、仙台。 |
| 2001年4～11月 | 農業および園芸、第76巻第4～11号、養賢堂、東京。 |
| 2001年9月 | 農林統計調査、第9号、農林統計協会、東京。 |
| 2002年7月 | 農耕と園芸、第57巻第7号、誠文堂新光社、東京。 |
| 2003年7月
～2004年2月 | 農業および園芸、第79巻第7号～第80巻第2号、養賢堂、東京。 |

紹介記事の成果として日本でもオビルピーハという名前が受け入れられるようになり、その多機能性特に美肌効果のある果物であることが知られるようになってきました。最近では何人かの研究者にもオビルピーハという呼び名が採用されるようになって、インターネットでいくつかのホームページが検索されます。マスコミでも何回か取り上げられました。その一例は下記のとおりです。

- | | |
|-------------|------------------|
| 2000年11月20日 | 河北新報 |
| 2001年1月17日 | 東北大学新聞 |
| 2001年2月21日 | 仙台放送 |
| 2001年7月30日 | 毎日新聞 |
| 2002年1月16日 | 健康産業新聞 |
| 2003年6月16日 | NHK仙台放送局（宮城県内版） |
| 2003年6月23日 | NHK仙台放送局（東北地方版） |
| 2003年7月1日 | NHKラジオ（NHKジャーナル） |

当研究室で育てているオビルピーハの苗木は、1999年に東北アジア研究センターの工藤純一教授とロシア科学アカデミー・シベリア支部のウラジミール・ペロスルードフ教授から提供された種子から育てたものです。平成15年に初めて花が咲き果実が実りました（写真1）。このことが最近になってNHKのテレビとラジオで取り上げられ、ペロスルードフ・ナターシャさんのコメントを交えて報道されました。偶然にも、ペロスルードフ教授ご一家のお世話をいただいたことになります。テレビ報道の直後、東北大学金属材料研究所に来日中のペロスルードフ教授の訪問を受けて、東北大学大学院農学研究科の研究圃場で育てられている、日本で初めて果実が実ったオビルピーハとご対面になられました（写真2）。

不思議な縁に結ばれた奇跡の美肌フルーツ・オビルピーハは岩手県陸前高田市の営農指導センターに提供されて、大規模実用化栽培試験に移されています。生育が順調に進み、花芽の分化が確認されたので、来年の春には花が咲き、果実が大量に収穫される予定です。地域の農業生産者に苗木を提供する段階にも入り、大きな期待を担って大切に育てられています。耕作放棄地の拡大する東北の中山間地において夢のあるフルーツとして明るい希望を提供するオビルピーハの生産が発展することを願っています。大手の加工企業の依頼を受けて、製品開発の検討を始めている段階にあり、近い将来に商品を提供したいと考えております。

このように、農業生産者と加工企業の熱い視線を受けているオビルピーハですが、日本の研究者には未だ真剣に受け入れられていないのは不思議なことです。世界中で注目され、大生産が始められているオビルピーハについては、平成15年9月にドイツのベルリンで初めての国際会議が開かれました。旧ソ連の崩壊後にロシアのシベリアから世界中に急速に広まったオビルピーハの生産利用および研究状況が報告されました。この機会を逃すことなく参加し、多くの情報を収集してきましたので、日本でも盛んにしていきたいと考えております。いつの日か、その成果について紹介する機会があれば幸いです。シベリアにはオビルピーハの関連都市が幾つかあるので、いつの日か訪問する機会も訪れることを夢見しております。

最後になりましたが、美肌フルーツ・オビルピーハの研究を始める機会を提供して頂いた東北アジア研究センターと小松基金に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。



(写真2) 東北大学のオビルピーハを訪れたペロスルードフ教授ご一家

AREA REPORT

SIGNAL

中国から SARS と広東人の食文化

新型肺炎・SARSは、その発生地とされる中国広東省や隣接地の香港だけでなく、世界中を混乱に陥れ、旅行業をはじめとする経済部門にも多大な損失を生じせしめたことは記憶に新しい。冬場に再び流行するのではないかとされているが、そうならないことを切に願うのみである。ところで、このSARSの発生源として、一時はハクビシン（果子狸）が有力視された。その後の研究で、どうもハクビシン原因説はぬれぎぬだったらしいことが判明したが、今回のSARS騒ぎは、広東人の食文化というものに対する風当たりを、ひとしきり強いものにしたことは事実である。

「広東人は何でも食う」というのが、中国国内はもとより世界的にも広く流布したイメージとなっている。実際のところ広東省地域では、「野味」と称してイヌ、ネコ、タヌキ、ヘビなど「野生料理」を専門とするレストランが各地にあり、こうした「野味」の中に、ハクビシンやモモンガなどの料理も含まれている。ハク

ビシンは最近では広東省の北部などで食用に養殖されており、イヌやヘビは内陸の湖南省あたりで養殖されたものが運ばれてくる。ただ、中国国内でも他の地域ではこれほど「野味」の食文化が発達していないので、SARS流行の際には、「それ見たことか！ 広東人が変なものばかり食うからだ。」と、白い目で見られることとなり、野生動物の取引や調理に対する規制も強化された。

もともと北京など中国北方の人々の間では、広東といえば南の辺境で、「野蛮」な地方文化が残っているところという先入観がある。他方、改革開放政策のもとでは経済的先進地の一つで、最近の広東人はやたらと羽振りがよい、というのも他地方の人々の印象だ。SARSの発生と共に、その原因をいち早く広東人の「特殊」な食文化の中に求めようとした研究者や報道機関の発想の裏には、こうした広東人への屈折した眼差しが潜んでいるようにも思う。

（瀬川昌久）

ロシアから 呪術の嫌疑



来客を歓迎するトーニャばあさん。ご冥福をお祈りします。

前号からの続きで、また呪術の話である。ここ数年、私はロシア・カレリア共和国で人類学のフィールド調査を行っているが、「カレリアは魔法の国」と言われるだけあ

って、不思議な話には事欠かない。母親たちはたいてい子どもの夜泣き治療の呪術を知っているし、村の呪術師は「政府高官の〇〇も××も私のおかげで出世できたんだよ」というようなことを言う。「私の洗礼母は実は魔女だったんです」と深刻な悩みを打ち

明ける若い女性がいるかと思えば、一生呪われ続けてきたのだと涙ながらに語る人もいる。

そんなカレリアで今年の5月、衝撃的な事件が起きた。調査地の村で、私のインフォーマントのひとり、トーニャばあさん（写真左）が、呪術の嫌疑をかけられて殺害されたのである。それも、グリム童話の「ヘンデルとグレート」に出てくる魔女とそっくり同じように、炉に突き入れられて。新聞でも取り上げられたこの事件だが、村人はあまり彼女に同情しなかった。魔女のように焼き殺されたなら、実際悪い魔女だったに違いない、という奇妙な理屈である。しかし私が見たトーニャばあさんは、優しい人だった。高齢でほとんど目は見え、耳は聞こえないながらも、突然訪問した私たちを大喜びで迎えてくれ、お茶を飲みながら身の上話を聞かせてくれたことは忘れられない。

殺人犯はその日のうちに逮捕された。私は今でもその村で調査を続けている。しかし、周囲で何か悪いことが起こるたびに、呪術か妖術の嫌疑をかけられるのではないかと、かすかに不安を感じてしまうのである。（藤原潤子）

内モンゴルから 内モンゴルにおけるイナゴの大発生

2003年7月31日、内モンゴル自治区の政府所在地フフホト市にイナゴの群が現れた。そのため、道路の清掃が午前3時から昼まで続いたと地元の新聞が報道した。話しによると、フフホト市には去年も大量のイナゴが発生し、人々がイナゴを集め、調理して食べたが、SARSの影響で今年はイナゴを集める人の姿がほとんどなかったそうである。

内モンゴルでは都会だけではなく、草原地域でもイナゴが大発生している。地元関係者の話によると、今年の6月からシリングル草原のほとんどの地域にイナゴの群が現れ、7月末までおよそ470万ヘクタールの草原に被害を与えた。イナゴは家畜による嗜好性が高い多年生植物ハネガヤ（*Stipa krylovii*）を好んで食べるため、草原の植生に大きなダメージを与えるケースがある。最近、夏の干ばつと冬の寒冷災害に連年襲われたシリングル盟は、イナゴを退治するための資金捻出が困難である。イナゴの被害を受けた草原の面積が広く、優れた移動力を持つイナゴの完全退治はほとんど不可能だと言われている。

「北京青年報」（2001.8.5）によると、2001年シリングル盟では530万ヘクタール面積の草原がイナゴによる被害を受けた。2000年から北京・天津地域の黄砂対策のため、シリングル



イナゴの清掃作業

盟を中心に内モンゴル草原の緑化プロジェクトが展開され、砂漠化が進んで来た草原植生の一部が回復しているが、今回のイナゴの大発生はその成果を食い尽くすほどの勢いであった。内モンゴルでは、今後もイナゴの発生が懸念されている。（颯叶）

駐ロシア連邦 野村一成特命全権大使 日本館訪問

東北アジア研究センター教授 工藤 純一



写真1: クズネツォフ所長の歓迎を受けTV会議に臨む野村大使

平成 15 年 7 月 18 日、駐ロシア連邦 野村一成 特命全権大使がノボシビルスクの日本館訪問を訪問されました。駐ロシア大使の訪問は平成 11 年 7 月 21 日の都甲岳洋氏以来です。

野村大使は、日本館駐在中の

塩谷昌史助手の案内により、V S A T システムを利用したTV会議に臨み、仙台の山田センター長と会談されました。V S A T システムは、1998 年に日本の大学で最初にシベリアの中心都市ノボシビルスクのロシア科学アカデミーシベリア支部に連絡事務所 日本館を開設した際に設置した日本で最初のロシア通信衛星を利用したコンピュータネットワークです。このネットワークはTV会議だけではなく、同支部で受信した米国気象衛星ノアからのデータをリアルタイムで本センターへ伝送し研究に利用しています。

写真1は日本館でTV会議に臨んでいる野村大使一行を歓迎する

クズネツォフ無機化学研究所所長からです。現地では大使の訪問にテレビ放送局も駆けつけ会議の様子を取材していました。TV会議の画面からは狭い日本館に人が入りきれない様子も見られました。写真2は仙台の本センターV S A T 会議室で大使と交信する山田センター長と工藤です。大使は東北大学の日本館を中心としたロシアの研究活動に大変関心を持たれ、ハッキリとした声で、今後の日本とロシアの学術交流の重要性を熱心に話されました。また、山田セン



写真2: V S A T 会議室で大使と交信中の山田センター長と工藤（後姿）

ター長からはシベリアの日本館訪問の御礼と今後の研究活動の支援を要請されました。TV会議は10分程度でしたが、この短い時間にもかかわらず大変有意義な会談ができました。

その後、大使は日本館のサイン帳に今回の訪問の感想を書かれ、次の訪問先へ向かわれました。

日本館 便り

nihonkan-dayori



入学式での入場行進

ロシアの学校では9月1日に新年度が始まり、入学式が始まります。先日、日本語を教えているロシア人の友人から、自分の教えている小学校の入学式に誘われました。それまでロシアの入

学式には興味は無かったのですが、「日本の入学式とはスタイルが全く異なるので、見ておいた方が良い」というので、見学に行きました。見学してみて日本とロシアとで学校の入学式は全く異なると納得できました。日本の入学式では講堂に全員が集まり、厳粛な雰囲気の中で校長先生の挨拶から始まりますが、これは日本のスタイルで普遍的なものではありません。ロシアの入学式は学芸会と運動会を組み合わせたようなもので、いかに参加者が楽しめるかに重点が置かれています。生徒全員が校舎前の広場に集まり、始まる前から流行っているポップスが流れ始めます。これは例えば日本の入学式直前に浜崎あゆみの歌が流れるようなものです。

入学式は生徒代表の男女一組が司会・進行を務め、さな

がらラジオのディスク・ジョッキーの様に進めて行きます。1年生と15年生は広場を行進して保護者に披露しますが、他の学年は各クラスでパフォーマンスを考え、見学者を楽しませるような芸を見せてくれます。モダンダンスやディスコ・ダンス等の踊りや合唱がありました。先生方の紹介も堅苦しいものではなく、まるでパリのファッション・ショーの舞台に立っているかのような振り付けで音楽と共にスタイリッシュに歩くのです。非常に見ていて楽しいものです。プログラムの最後の方では最高学年のお兄さんとお姉さんから新入生に対して絵本の贈り物がなされ、新入生は先輩に花を贈ります。この時に新入生の親御さんはカメラ



入学式でのダンス

やハンディカムを持って我先に我が子の下に走り、決定的瞬間を捉えようと走り回ります。この姿は日本人の両親がわが子の運動会で見る姿に似ています。入学式を取ってみても、その国の国民性を反映しているのだという印象を持ちました。

(塩谷昌史)



入学式後一斉に解き放たれた風船

研 究 機 関 紹 介

モンゴル科学アカデミー・ウランバートル大学

ウランバートル大学は、1992年、モンゴル科学アカデミーによって創設された技術大学を前身としている。1995年、技術大学は教育省の認可を得て総合大学のステータスを獲得した。同大の特色は、科学アカデミーの各研究所の研究者が教官を兼務し、教鞭を執ることによって、高度な教育を施すとともに、次世代研究者を養成することを目的としている点にある。当時の技術大学には、精密機械、化学技術、応用物理、応用数学が設けられ、1993～1994年度には、社会科学部が設置された。

2002年の時点で、同大には80名の教官が在籍している。現学長は言語学者のS.パイガルサイハン教授である。

現在ウランバートル大学は三つの学部、一つの大学院、物理学・技術、化学、化学技術研究所及び観測所、インフォメーション・センターを有している。

学部組織は、技術学部 (Technological Faculty)、言語・文学部 (Faculty of Language and Literature)、社会科学部 (Faculty of Social Sciences) からなる。

技術学部は4つの学科、すなわち応用数学・ソフトウェア学科 (Department of Applied Mathematics and Software)、物理・電子工学科 (Department of Physics and Electronics)、化学・化学技術学科 (Department of Chemistry, Chemical-Technology)、生物学科 (Department of Biology) から成る。技術学部の各学科は、専門科目 (Special Course) と教養科目 (Current course) を設置している。

言語・文学部は、アジア諸言語学科 (Department of Asian Languages)、言語学科 (Department of Linguistics)、ヨーロッパ言語学科 (Department of European Language) によって構成されている。この学部では、教育コースとして、モンゴル語・日本語研究 (Mongolian-Japanese Study)、モンゴル語・中国語研究 (Mongolia-Chinese Study)、モンゴル語・朝鮮語研究 (Mongolian-Korean Study)、モンゴル語・英語研究 (Mongolian-English Study) を設けており、それぞれ言語学・文学及び通訳養成の講義を開いている。教養科目としてはアルタイ諸語、西洋言語、東洋文学、言語学、文学、方法論の科目が置かれ、専門科目として各学科ともモンゴル現代文学、文体論、語彙論、文献学の講義が設置され、各学科それぞれ日本語・中国語・朝鮮語・英語の語学及び通訳養成科目、各地域研究科目が設置されている。

社会科学部を構成するのは、歴史学科 (Department of History)、考古学科 (Department of Archaeology)、哲学・社会学科 (Department of Philosophy and Sociology) である。社会科学部では、教育コースとして日本研究 (Japanese study)、中国研究 (Chinese Study)、朝鮮研究 (Korean study) の三コースを開設している。たとえば日

本研究コースでは、教養科目として英語・ロシア語、美学、倫理学、論理学、資科学、歴史地誌学、モンゴル史の講義があり、専門科目として考古学・アーカイヴ学基礎や、仏教哲学、世界史、モンゴル考古学、旧モンゴル文字、モンゴル史、伝記研究の各講義や、日本語及び通訳養成のための講義が開設されている。語学の部分は中国研究コースでは中国語に、朝鮮研究コースでは朝鮮語になる。

つまり言語文学部と社会科学部では、共通の専門教育に各語学コースを組み合わせることによって教育コースの設定を行っているわけである。

大学院コースとしては、人文学・言語学・文学・歴史学・アジア研究大学院と科学技術大学院が設置されている。これら大学院の学生は、ウランバートル大学で講義を受ける一方で、アカデミーの研究所に配置されて専門研



ウランバートル大学校舎

究の訓練を受けるシステムになっている。また、モスクワ・パワーエンジニアリング学院 (Moscow Power Engineering Institute) との間には共同エネルギー学院 (Joint Energy Institute) が設置され、共通の教育プログラムが設定されている。

国外の教育研究機関との提携の例としては、モスクワ・パワーエンジニアリング学院のほかに、モスクワ師範大学、コロラド大学、神戸大学、大阪国際大学、韓国の檀国大学、Pohang大学、中国の蘭州大学と協力関係にある。東北大学とは、2000年にモンゴル科学アカデミーとの間で締結された学術交流協定に基づく学生交流が行われており、2002年に本学の阿部前学長がモンゴルを訪問した際、アカデミーから名誉博士号を授与されている。

(岡 洋樹)

モンゴル科学アカデミー歴史研究所とシンポジウム共催

9月15日、モンゴル国ウランバートル市にあるモンゴル・日本センターを会場として、シンポジウム「モンゴル史の諸問題：歴史学・民族学からのアプローチ」がモンゴル科学アカデミー歴史研究所との共催で開催された。モンゴル科学アカデミー副総裁B.エンフトゥゥシン氏による開会の挨拶の後、プログラムに従って以下の発表が行われた。

O.オユンジャルガル（東北大学）「清代ホヴド参贊大臣管区に関する一史料について」。これは、ホヴド参贊大臣であった富俊が表した『科布多政務総冊』に関するもので、モンゴル科学アカデミー所蔵のモンゴル文写本、台湾から刊行された二つの漢文テキストを比較し、本資料の成立年代及び成立過程を明らかにするものである。

G.ダシニヤム（歴史研究所）「清代外モンゴルの一法律史料」は、報告者が発見した雍正元（1723）年から光緒14（1888）年に至る期間の案件44件を列記した71葉からなる档冊に関する報告である。同氏は、『理藩院則例』等清朝蒙古例の現実への適用が困難な場合に新たにたつた措置を記録し、法律に準じるものとして残したものであると主張した。

L.アルタンザヤ（モンゴル国立師範大学）「あるイヘ・シャビ属下の起源について」は、アルヒーヴ所蔵の文書資料に基づいて、内モンゴルからのジェヴツンダムパのシャビ（教会領属民）への属民寄進について具体的事例を報告するものであった。これは、シャビの実態について、新しい知見を報告したものである。

S.ツォルモン（歴史研究所）「十七世紀の清朝とモンゴル関係に関する書信について」は、康熙帝のガルダン遠征について、フランス王に当たった書信が当時刊行されているが、この書信の作成者について考証したものであった。同氏によると、この書信は、康熙帝の側近として中国に滞在していたイエズス会士ジェルビヨンの作になるものであるという。

A.オチル、N.ハタンバートル（歴史研究所）「18—19世紀外モンゴルにおけるダルハン制度」は、清代のモンゴルにおけるダルハン制度、すなわち税免除特権に関する報告であった。この報告では、ハルハ地方で授与されていたダルハン特権について、アルヒーヴ所蔵の康熙25年から乾隆48年の期間におけるダルハン特権授与文書を写したトシェート・ハン部档冊が紹介された。

岡 洋樹（東北大学）「清代モンゴル社会におけるオトグ・バグ」は、清朝が旗を編成したことによって、基本的には消滅したとされてきた服属前の社会構造で、清代



シンポジウム会場の参加者

のかかりの旗の文書資料に見られるオトグと、マイスキー等20世紀初頭のモンゴルで調査を行った研究者が言及しているバグが、旗の王公タイジ分枝の属下の社会構成であることを、アルヒーヴ所蔵の文書資料による事例研究の結果によって述べるとともに、かかる王公タイジ属下の社会構造が、内モンゴルにおいても広く見出されること、従って清代のモンゴルのザサグ旗の社会構造を清朝の法制によって規定された旗・佐領構造においてのみ理解することはできないことを主張した。

L.テルビシ（モンゴル国立大学）「モンゴルの暦学書、その利用の伝統」は、モンゴルの伝統的な暦学において、チベット起源の暦法と、中国起源の暦法が共存していることを明らかにしたものである。

吉田順一（早稲田大学）「モンゴル食文化考」は、モンゴルの食文化における生肉食の習慣と喫茶の習慣を関連づけながら、漢文史料に残された記述から、モンゴルにおける茶の利用が16世紀をさかのぼらないこと、それ以前のモンゴルにおいては、肉の生食によってビタミン摂取がなされていたことを明らかにするものであった。

アルタンガラガ（早稲田大学）「現代環境論から見たモンゴル高原」は、モンゴル高原東部ジレム地方における開墾の進展が、自然環境やモンゴル人の社会に深刻な影響を与えたことを強調しつつ、環境研究の立場からこの問題の重要性を主張するものであった。

会場には、アカデミー歴史研究所、モンゴル国立大学、モンゴル国立師範大学などから、約60名の参加があり、各報告に対して活発な質問と討論がなされた。

（岡 洋樹）

最近のセンター出版物より

『東北アジア研究』第7号 2003年3月刊行

●『元朝秘史』におけるモンゴル語と漢語の人称代名詞の対応／栗林均 ●ロシア・カレリア地方に生きる一女性の人生と呪術——ナターシャ・クルチーナ不幸をめぐる民族誌資料——／藤原潤子 ●体制転換とロシア旧教徒——ブリヤート共和国セメイスキー住民の信仰のゆくえ——／伊賀上菜穂 ●白頭山（長白山）の爆発的噴火史の再検討／宮本毅，中川光弘，長瀬敏郎，菅野均志，大場司，北村繁，谷口宏充 ●3次元ヒストグラムを用いたNOAA画像海域カテゴリーの境界決定法／河野公一，工藤純一 ●Philipp Franz von Siebold's Correspondence with Leading Russian Diplomats 1852 to 1853 in the Context of his Endeavors to Open Japan for Trade and Navigation／エドガー・フランツ，吉田忠 ●Shifting patterns of economic cooperation in Northeast Asia: developments in the 1990's and future perspectives／ボボヴァ・リュードミラ ●Primary Mineralogy of Late Miocene Picrobasalt from Vitim Volcanic Field: Implication to Evolution of Primitive Melts／コンスタンチン・リタソフ，伊藤嘉紀，ウラジミール・マルコヴェツ，ユーリ・リタソフ，谷口宏充 ●明末清初教派系宝巻の版本について／磯部彰



黒田卓・高倉浩樹・塩谷昌史編

『中央ユーラシアにおける民族文化と歴史像』

東北アジア研究センター叢書第13号、2003年。

本書は、2000年2月に発足した当センターの共同研究「東北アジアにおける民族移動と文化の変遷」テュルク研究班の研究成果をまとめたものである。中央ユーラシアの歴史・文化に関する11本の論文を掲載している。内容は以下の通り。

●序論——中央ユーラシアの民族文化と歴史像——／黒田卓 ●トカ＝テムル裔の系譜情報の復元／赤坂恒明 ●オルマンベトとその時代——口頭伝承に現れるノガイ＝オルダの有力者について——／坂井弘紀 ●19世紀前半のロシア貿易におけるアジア商人の役割——アジア向け綿織物輸出の観点より——／塩谷昌史 ●ロシア革命期の中央アジアにおける「トルキスタン」の政治的領域をめぐって／帯谷知可 ●ジャンギアリー運動末期におけるイラン・ソ連関係の一面——関連ロシア語文書の紹介——／黒田卓 ●ウズベキスタンにおけるオペラ劇場——ソ連邦期中央アジア文化政策の一側面——／浅村卓生 ●クルグズスタンのナショナルおよびエスニック・アイデンティティ／チョタエヴァ・チョルボン ●サハ共和国（ヤクーチア）における天然資源と民族政治／イグナティエヴァ・ヴァンダ ●ヤクート人同盟の成立と流刑者のかかわり／勝木英夫 ●サハ社会における馬飼育と不在家畜所有——ポスト社会主義下における家畜委託関係と社会経済的変動の諸相——／高倉浩樹



センター動向

■寄附研究部門

【環境技術移転（NKK）寄附研究部門】

- 渡邊 之（ワタナベ、イタル）教授：環境技術（平成13年1月着任）
- 魁叶（スエー）助手：環境政策（平成13年4月着任）

■地域環境研究部門資源環境学研究分野

SAVELYEV, Timofei Grigorievitch（サバリエフ、ティモフェイ・グリゴレイビッチ）助手：レーダ信号処理（平成15年8月着任）

■現在の客員研究者

本年10月～12月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

〈客員教授〉

【国内から】

- 和田春樹（ワダ、ハルキ）教授：東京大学名誉教授・ロシ

ア国立人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究

- 江夏由樹（エナツ、ヨシキ）教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 田村正行（タムラ、マサユキ）教授：国立環境研究所上席研究官、ノアデータを利用したシベリアの環境解析

【海外から】

- 朴承憲（ボク、ショウケン）教授：中国、延辺大学東北亜研究院・院長、図們江域新経済圏構想の再構築構想の検証
- CHERNYAVSKIY, Leopold Isaakovich（チェルニャフスキー、レオポルド・イサーコヴィチ）教授：ロシア、ロシア科学アカデミー・シベリア支部無機化学研究所情報研究部・部長、VSATシステムの利用促進に関する研究

〈客員研究員〉

- 周正舒（ゾウ、ゼンシュウ）研究員：中国、電磁波による環境計測に関する研究
- MORRIS, John Francis（モリス、ジョン・フランシス）研究員：オーストラリア、宮城学院女子大学国際文化学科教授、近世東北史に関する研究

（岡 洋樹）

東北アジア学術交流懇話会

会員の広場

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペース（不定期）です。今回は、大学でロシア語を修められた後、新聞社にて特に旧ソ連・ロシアを中心とした国際関係の報道・論評にあたられ活躍された佐々木 幹夫会員殿にご登場戴きました。退職後も、各種研究会・ロシア人留学生との交流会への積極参加、さらにトルコ語修得チャレンジ中など幅広くご活躍中です。

所感：カムチャツカの熱き思い



(写真1) アバチャ湾岸にて； 短い夏を惜しんで小学生達が海辺で日光浴を楽しむ。後方には白い雪を頂いた標高3000～4000メートル級の火山群が連なる。

このなかに出てくるS.P.クラシェニンニコフの「カムチャツカの土地の記述」（通称「カムチャツカ誌」）に、感慨を覚えました。七年前の夏、初めて訪れたカムチャツカ半島の中心都市ペトロパブロフスク・カムチャツキーで「カムチャツカ誌」（1755年出版）の復刻本を買い求めていたからです。この書には1729年に半島に漂着した薩摩船「若潮丸」の二人、ゴンザとソウザが登場します。ともにかの地でロシア正教徒になり、日本語教師となりました。ゴンザはデミアン・ボモルツェフと改名し、後見役の学者アンドレイ・ボグダーノフと共に初の露日辞典を編さんしました。ボグダーノフやクラシェニンニコフの記述がなかったら、思いがけない運命にもあそばれたゴンザとソウザが、日ロ関係史のなかで残した功績は日本人には知られなかったでしょう。これら貴重な史料を翻訳、整理してくださる大学研究者の皆さんに敬意を表さないではいられません。

私がかの地を訪ねた1996年夏は[写真1]、仙台―ペト

佐々木 幹夫
(元河北新報社論説委員)



ロパブロフスク・カムチャツキー間に、初めて直行チャーター便が飛んだ時でした。三時間弱。所属しているNPOカムチャツカ研究会の後押しで実現した企画でした。現地では「開発と環境」のシンポジウムに加わりました。産・学・官、民間人が集まった席で、ロシア側から示されたのは広い分野で日本との交流を深めたいという熱意でした。有力紙「ベスチ」のイスカンデル・カキモフ社長は、同社を訪ねた折[写真2]、日本でも特に宮城県、仙台市との交流を強調しました。①直行3時間の地の利 ②環太平洋の拠点 ③水産業などとの経済的関係 ④東北大学との学術交流を挙げ、社説「日本とカムチャツカ、我々は近くなった」で、仙台市を「日本で最も美しい都市の一つ」と紹介しました。現地の熱意は今なお変わっていません。その熱き思いに応えるのも、東北アジア研究センターの役割の一つである、と考えるしだいです。



(写真2) カムチャツカの有力日刊紙「ベスチ」社にて； 向って右端がイスカンデル・カキモフ社長、中央が筆者、左端は橋井カムチャツカ研究会理事



事実は一つであって、しかもその同じ事実を当事者双方が認めていても、自らの解釈を他者に押しつけようとするれば紛争が起こります。中国と韓・朝間に芽生えた歴史認識の違いが我が国周辺のさらなる不安定要因とならないよう願わざるを得ません。

(柳田賢二)

《うしとら》（東北アジア学術交流懇話会ニューズレター）第19号 2003年10月31日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会 編集 東北アジア学術交流懇話会ニューズレター編集委員会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学東北アジア研究センター 気付

PHONE 022-217-7580 FAX 022-217-6010

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail : iwayama@cneas.tohoku.ac.jp